

高野・粉河詣での道を辿る旅

一文字 昭子

今回の企画のきっかけは『狭衣物語』の主人公、狭衣が出家の志を秘めて高野・粉河へ詣でる道筋を辿り、文学作品を新たな視点から体験してみようというものであった。

しかし物語では吉野川を粉河へ下る場面しか描かれていない。都から高野までは不明である。そこで治安三年（一〇二三）十月の藤原道長の道程、および『狭衣物語』のこの場面のもととなったと指摘される永承三年（一〇四八）十月の藤原頼通の道程、古来都人が高野詣でもっともよく利用したという東高野街道を往路、復路にわけて辿ることとした。なお、時間の関係上、京都から飛鳥までは省略し、道長が飛鳥の諸寺をたどったところから始めた。そして、個人的に行きやすい箇所は敢えて省略したことを最初にお断りしておく。

なお、今回の旅は園田学園女子大学の公開講座であり、講師は同大学教授、福岡昭治先生である。又同志社女子大学の瀧谷寿先生にオプザーバーとして参加して頂いた。最初に原案を頂いたのは後藤祥子先生である。

本元興寺（飛鳥寺）・山田寺

治安三年（一〇二三）十月十七日、藤原道長は教通や俊賢、能信等の人々を従えて高野山金剛峰寺への参詣に出発する。

入道前大相國詣紀伊國金剛峰寺。則是弘法大師廟堂也。路次拝見七大寺并所々名寺。

〔扶桑略記〕

道長一行は、まず巳時に宇治へ到着し、その日は東大寺に宿を取った。以下、

十八日 東大寺・興福寺・元興寺・大安寺・法蓮寺・

山田寺

十九日 本元興寺（飛鳥寺）・橘寺

二十日 竜門寺

二十一日 吉野川にて乗船

という道筋を辿っている。

我々は最初に本元興寺へ向かった。本堂の飛鳥仏は火災の

あとが痛々しいが、天平の面影を宿した異国的な面立ちの仏様として知られる。寺が火災に遭い建物が亡くなった後、長い間藁などをかぶせて野ざらしになっていた時代もあるそうである。しかし、決して錆つぶされてしまうことなく千年余の時を経てきた。そういったことをお寺の方が慣れた様子で説明を下さる。仏様は左右でお顔付きが変わってくるという。お寺としては珍しく写真撮影の許可を頂いたので左右から写真を撮る。裏手の門の先には蘇我入鹿の首塚がある。石塔はかなり古いので道長の当時からあったものかも知れないという。大化改新のときに切られた入鹿の首が転がってきたとすると伝える。長い間、埋められたところかと思っていたがそうではないようである。蘇我氏の邸宅があったとされる甘樫丘と飛鳥浄御原宮といわれる遺跡の間に立っているので余計に想像力が働いてしまう。

次の山田寺は現在は遺構が残っているのみであるが、盛り土等により北山の山並みを背に立つ往時の様子を想像することができる。奈良市内よりの古道、上つ道の要衝にある。大化改新の功労者、蘇我倉山田石川麻呂が発願し、そして自殺した寺である。文治三年（一一八七）に奈良興福寺の東金堂衆が山田寺の金銅丈六薬師三尊像を奪い取り、東金堂の本尊としたことが『玉葉』に記され、応永十八年（一四一一）、興福寺五重塔に落雷があり東金堂が類焼した時に焼失したと考えられてきた。しかし昭和十二年（一九三七）になって東金

堂の現本尊の台座から頭部が発見されたことはあまりにも有名である。その仏頭は現在、奈良興福寺国宝館に安置されている。山田寺に道長が立ち寄った時のことは『扶桑略記』に次のように書かれている。

道中以奇偉莊嚴、言語云默、心眼不及

このときはまだ、堂塔伽藍は健在であった。建久八年（一一九七）撰の『多武峰略記』ではすでに遺跡と化していたと記されている。

上つ道をはさんで向かいに飛鳥資料館が景観を損なわないように低くたてられている。そこに山田寺から倒れたときそのままの形で出土した連子窓の遺跡がPEGによる保存技術によって永久保存されている。PEGとは遺物の水分をポリエチレングリコールに置き換えて、細胞の変形を防ぎ、強化して出土時のままに保存する技術だそうである。福嶋先生がお持ちのパンフレットは発掘の様子や保存について詳しく説明されており、かつ分かりやすそうなので早速、購入。

道長はこれらの諸寺を参詣した後、山を越え、多武峰を通って竜門寺へ行ったと考えられている。その道は現在でも残っているが、福嶋先生のお話では普通乗用車でも通るのがやっという所もあり、大型バスの通行は全く不可能とのこと。残念であるが大宇陀町の方を迂回する。附属の地図にその道とおぼしきところに点線を付した。ここの辺の道筋について

は福嶋先生が事前に詳しく調査してくださったうえに、今回のドライブ、木村五郎氏は全国の道に明るく、福嶋先生も全幅の信頼をおいている方なので大船に乗った気分である。

竜門寺跡

さて、竜門寺は醍醐寺本「諸寺縁起集」に収められている竜門寺縁起によると岡寺とともに義淵僧正が国家の隆泰と藤原氏の栄昌を祈って建立されたものであると伝える。高野山参詣の道長がわざわざ遠回りして寄ったのも、藤原氏の繁栄を願ったことと思われる。一方では大伴仙・安曇仙・久米仙の三人によって開基されたとも伝えられ、平安時代は非常に栄えた寺であったようである。その様を『扶桑略記』は次のように記す。

次漸向晩頭。次竜門寺。于時仙洞雲深。峽天日暮。青苔巖尖。瀑布泉飛。見其勝絶。殆欲忘帰。礼佛之後。留宿上房。

（治安三年十月十九日条）

山口の手前、小島峠を越えて、バスを降り、吉野山口神社のところから竜門岳に向かって、山口岳川に沿って登る。三十分ほど山道を行くと、まず、下乗石があり、更に十分ほどして五重塔の土台がのこっているとたどり着く。説明板には昭和二十八年（一九五三）に奈良県教育委員会の発掘

で塔跡が確認されたこと、急斜面を削り、小型の自然石を使用した方約六、三メートルの乱石積基壇であることなど書いている。現在は周りをフェンスで囲っているが、中には入れる。中央の心礎と側柱礎石も確認できる。

道の脇を流れる川は五重塔の少し下で滝になっている。

伊勢集に

山とに三月ばかりありけるに、りう門といふてらにまうでたりけり、正月十一日ばかりなりけり、このてらのさまはくものなかよりたきはおつるやうにみゆ、山の人のいへといふはいたうとしへていはのうへにこけやへむしたり、みしらぬ心ちにかんしう物のみあはれにおぼえてなみだはたきにおとらず、はしのもとにしばしあるにいとくらうなりぬ、雨やふらんとすらんとともなる人といふ、法師ばら、雪ぞふらんといふほどに、いみじうおほきなるゆきかきくらしふれば、人人歌よまむといふに、このまうでたる人

たちぬはぬききぬきし人もなきものを
なにやまひめのぬのさらすらん

とよみたりければ、さらにこと人よまずなりにけり、いまはみにいでてこしべといふ所にやどりぬ、かのみてらのあはれなりしをおもひいでて

みもはてずそれにきえなでかぎりなくいとうきよに
みのかへりくる（後略）

とあり、伊勢が往時、女人の身でこの険しい山寺に来たことが知られる。肝心の滝は木立に遮られて直接は見られないが、思い切つて崖を降りてこわごわのぞいてみるとなるほど水が白布のようにこまかな水煙を漂わせながら落ちていく。こわごわ手を伸ばして写真撮影。これはなかなかの傑作写真となった。

下乗石には元弘三年（一二三三）の銘があり、「大和志」の廃竜門寺の項に

在山口村上方大門故址下乗石尚存

とある。なお、山口の薬師堂の庫裏は竜門寺のものであったと伝えられる。室町時代、永正三年（一五〇六）に焼失してから廃寺となったと考えられている。元禄元年（一六八八）には松尾芭蕉がここを訪れ、『笈の小文』に

竜門の花や上戸の土産にせん
酒のみに語らんかゝる滝の花

と詠んでいる。

さて、道長はここから吉野川に出て、船で高野まで下つて

わりそうである。そうして市街に入る手前小島町というところ、栄山寺がある。

栄山寺

栄山寺は直接には道長の参詣記とはかわりがない。ただ、吉野川沿いにあるということと、南朝の長慶天皇の行宮になつていたということ、国宝の八角堂と梵鐘があるというので寄ることにした寺である。もとは藤原南家の祖武智麻呂の建立した寺であり、後ろの山には武智麻呂の墓がある。道長は北家なので直接には関わりがないのでわざわざ船を留めなかつたのであろうか。栄山寺は川沿いに細長く建物が連なっているという感じで建っている。長慶天皇は『源氏物語』の語に説明を施し、それをイロハ順に並べた『仙源抄』を著している。栄山寺は天皇の行在所としてはあまりにもささやかな寺である。現在、長慶天皇の御陵は嵯峨野の賑やかな場所であり、その差はあまりにも大きい。

入り口の入ったすぐのところに国宝の梵鐘がある。龍頭の精巧なこと、均整のとれた鐘身の美しさが飛び抜けていると評され、京都神護寺、宇治平等院の鐘とともに平安三絶の鐘と言われているそうである。鐘の表にある銘文からもと山城深草道澄寺の鐘であったことがわかる。菅原道真撰文、小野道風書と伝えられている。

奥に八角堂がある。武智麻呂の次子、仲麻呂が亡くなった父母の菩提を弔うために建てたものである。内陣の柱や天井

いったのであるが、現在この流域で川下りはなく、我々は川沿いの道をバスで辿る。吉野川は川面が非常に深く、水量が少ないように思えたがそれは上流にダムができたためとのこと。地図を見ると、上流には大迫ダム、支流の津風呂川には津風呂湖（ダム）等いくつものダムが確認できる。

竜門寺跡からすぐ下の吉野川辺、山口の辺りに川を挟んで妹背山がある。古今集などで間違つて詠まれた妹背山で、福嶋先生のおっしゃるいわゆる「偽の妹背山」である。本居宣長が『菅笠日記』に

吉野川、隙もなく浮かべる筏を押し分て、こなたの岸に船さし寄す。夕暮ならねば、渡し守は「早」とも言はねど、伊勢物語に「渡し守「はや船にのれ日もくれぬ」といふに」云々。みな急ぎ乗りぬ。「妹背山はいづれぞ」と問へば、河上の方に、流れを隔てて、相向ひてま近く見ゆる山を、「東なるは妹山、西なるは背山」と教ふ。されどまことに此名を負へる山は、紀の国にありて、疑ひもなきを、かの 中におつる吉野の川、に思ひおぼれて、必こと定めしは、世の好者のしわざなるべし。

と書いている。五条市に入ると吉野川は複雑な蛇行をはじめ。その為、川に沿った道は細く、何度か渡る橋は大型バスでやつと通り抜けられる程の幅しかない。バスの席は高くなっているのだからさえ高い橋の上から見下ろす川は目がま

に美しい文様や天人が描かれているそうであるが、中は真暗で、何も見えなかった。栄山寺の見学を終え、今日の予定はあと、高野山へ行くのみである。

一路高野山をめざす。和歌山県にはいると同じ流れの川は紀ノ川と名前を変える。寛治二年（一〇八八）二月の白河上皇の高野山参詣の道程は深草・宇治平等院・泉河・東大寺・興福寺（山階寺）・火打崎・高野政所・高野山と記されている。この中の火打崎は五条市の西端、紀ノ川の南岸にある火打町ではないかと考えられているが、このあたりは宇智郡であり、記録には「葛上郡火打崎」と記されるので問題とされている。

鳥羽上皇も天治元年（一一二四）十月に火打崎を通り、真土坂を通つて紀伊河辺から乗船し、慈尊院に至ったことが『高野御幸記』（群書類従第二輯帝王部）に書かれている。

真土山は飛鳥時代からあった地名で、現在の五條市上野町から和歌山県橋本市真土に至る県境の待乳峠と考えられている。ただ、峠の位置やルートは時代によって変遷したと思われる。古代には峠を直接越えず、丘陵南を迂回したらしい。いづれにせよ、この辺であることは間違いない。バスは国道二十四号線をひたすら西へ向かう。紀伊山田駅の少し先から紀ノ川へ向かい、橋を渡つて九度山町へ入る。山頂を目指す前にかじかドライブインに立ち寄る。崖に緑の大きなかじかがしがみついているので間違えようがない。

暑さですこしバテ気味である。九月は先生方も夏休みであ

り、日程の調整が楽なのであるが、今年の暑さは格別である。山の上が涼しいことを期待する。ドライバーの木村さんからこの先はハンドルを切らないときはないほどカーブが連続し、かつ道が狭いので覚悟するようにと注意をうける。

バスが登り始めた道は高野山でも古い道で地図には「高野山町石道」と記されている。『弘法大師行状絵詞・下』（続日本絵巻十一・小松茂美編・中央公論社）にも平安の貴族たちがこの道を通っている様が描かれている。山頂へ至る道で大型バスが通行できるのはここだけのこと。九度山町から電車にのり、最後はケーブルカーで上がる方法もある。対向車がくると一度双方が停車し、登りの車が抜けられるようにバックして道をあける。ものの、十分もたたない打ちに車酔いで気分は最悪。この後、一時間ほどはほとんど記憶なし。地図の確認も一本道なので後回しにした。後で地図をみると、川沿いに山中を縫って行く道でさぞ、深山幽谷の景色が素晴らしかったのではないかと思われるが車酔いには勝てない。

高野山

山頂は開けて平地になっており、思いの外広い。無論涼しい。比叡山のように山のあちこちに堂塔が散在しているというのではなく、開けた場所に整然と建物が続いている。今晚の宿は蓮華定院という宿坊で臈谷寿先生の御厚意で取っていただいた。ちょうど八日の夜、人間模様というテレビ番組でこの宿坊の女将の半生を辿ったのを見たのできれいで大き

かなりの人数が本堂に向かっている。ほぼ全員ではないだろう。本来ならば出てどんなお話があるのか記録すべき立場なのであるが、なかなか起きられない。ぐずぐずしている間に時期を逸し、あきらめて体力温存をはかる。その間にお坊さんが皆の部屋の布団を片づけている。一時間ほどしてやはり最後の方だけでも聞いておこうと本堂に向かう。本堂は扉が閉まっただけで住職の声がときどき、漏れてくるのみである。縁先に立って神妙にその声を聞いた。まるで立たされているよう。後で聞いたところによると奥の院へは是非、行くようにということであつたらしい。

しかしながら我々の今回の旅は参詣の道を通ることなので高野山はまた次の機会に譲り、大塔と金剛峯寺のみ、参拝した。高野山は個人でいつでも来ることができる。大塔へ行く途中に「四町太上天皇」と書かれた石の碑がある。これが、有名な高野山町石である。弘法大師が参詣者が山中を迷わないように建てた木の道標がはじまりで昔は町卒塔婆と呼ばれていたそうである。弘安年間（一二七八年～一二八八年）に木の卒塔婆が腐朽したので石に代えられたとのこと。破損することによって補修されて現在に至る。大塔のそばには「一町」とのみ書かれた町石が立っている。山頂から一町、二町、三町と麓まで続く。石にはその町石を寄進した人の名が記されている場合がある。梵字が彫られとても趣のある石塔である。猶これらの町石および里石は『高野口町誌』（昭和四十三年・高野口町教育委員会）に拠ると全部で二二〇基あり、文献と

い宿坊であることは知っていた。まずは大広間に通され、先祖供養の勧めを受ける。女将の説明を聞いているうちに車酔いがピークに達してきたが、幹事としては取り敢えず部屋割を決めるまでは我慢しなければ無責任ということになる。頭脳がない分、体力で勝負と思っていたが、体力もあまりないことが判明しそうであつたと悔しい。部屋割を決め、幹事部屋に転がり込みダウン。あとで、聞いたところによると宿坊の夕食はとてもおいしい精進料理だったそうで「残念だったね」と言われてしまった。最も直に回復して非常に美味なお菓子と思い出のお茶を頂き大満足であつた。

翌朝、六時から住職の法話があるとのことであるので早めに就寝。久しぶりに日本家屋での畳・襖の部屋なので廊下を歩く音が気になるがすぐに寝入ってしまった。翌朝、持参した目覚まし器が鳴る前に法話に出ようとする人々の足音が目覚める。同室の友人曰く「源氏物語の夕顔の家に泊まった源氏ってこんな気持ちだったのかな」参考までに該当箇所をあげておく。

こほく／＼と鳴る神よりもおどろく／＼しく踏みとどろかすから臼のをともし枕上とおぼゆる、あな耳かしかましとこれにぞおぼさるゝ。何の響きとも聞き入れ給はず、いとあやしうめざましき音なひとのみ聞きたまふ

（大系一・一一六頁七行目）

平行して調査が進んでいるようである。

大塔で集合写真を撮影してバスに戻る途中、愛染堂で護摩を焚いて法要を行っているのに気がついた。狭いお堂の暗闇の中、勢いよく燃え上がる炎が妙に見慣れた感じである。そういえば時代劇でよく、こんな場面がある。

名残は惜しいが早々に高野山を下りる。地獄の山道は朝、酔い止めを頂いたので大丈夫だった。今度は景色ばかりかスリルも十分に味わった。

道長も頼通も高野山に登るにあたってはまず高野政所というところに泊まり、それから入山している。詰めの甘い私は高野政所は高野山の麓に入ったところに当時あったもので現在はないのだろうと考えて、最初の行程には含めていなかった。しかし、後藤先生から慈尊院という麓の寺がまさに高野政所の跡と指摘され、急遽そこも行くことにする。弘法大師が金剛峯寺を建立する際、高野山の山頂まで犬が先にたつて案内したという伝説が残っているらしい。

臈谷先生のお話によると慈尊院に飼われているゴンという名の犬が高野山へ登る御住職のお供をしている内に道を覚え、参詣者の先にたつて案内するようになったそうである。テレビでも紹介されていたとのこと。随分まえのことなのでおそらく今は老犬になってしまったが、いるかもしれないという。果たして入り口の建物の脇で老犬が腹這いになって寝ていた。ゴンらしい。名前を呼んでも寝ているが一応、記念撮影。伝説の犬の生まれ変わりかも知れない。御住職がいら

して説明してください。慈尊院はもともとは弘法大師の母が息子を訪ねて四国から出てきたが、女人禁制なのでここに住み着いたことが起こりだそうである。後、高野政所となって入山の管理をしたのであった。ただし、ここに立ち寄って入山の準備をしたのは上皇や摂関家などの皇族・貴族のみである。紀ノ川の流れが変わって境内がだいぶ削られたそうである。表門の脇に下乗石がある。天文九年（一五四〇）の紀ノ川の大洪水によって流出した旧慈尊院の南門に建立されていた下乗石の上部である。紀伊名所図会に保延三年の建立であることが記され、それが本当だとすると県下で最古の下乗石となることが説明板に書かれている。今は「下」の字までしかわからない。脇の門をでると昔の山頂へいたる道がある。あまり長居できず名残おしいが発する。なお、慈尊院には乳をかたどった奉納品があちこちにかかっている。昔、有吉佐和子の「紀ノ川」でたしかこの奉納品のことを書いた場面があつてそれなりに想像していたが想像とはちよつと違つていた。後で他の人に聞いた話によると、ご住職の話よりさらに気を取られている人が多かつたらしい。確かに改めて考えるとかなりのインパクトのあるものではある。

根来寺・妹背山・粉河寺

『狭衣物語』では高野詣でをすでに終えた狭衣が船で吉野川（紀ノ川）を下っていく場面が和歌を交えて語られる。それは霜月も十日になつて紅葉も散り果て、野山も見所なく雪

霰がちな荒涼とした風景である。旧暦の十一月は現在の十二月頃であるから二ヶ月以上も早いこの季節ではまだ、夏の強烈な日差しが照りつけ物語の情景とはほど遠い。ただ、

浅瀬は船も行きやらず、棹さしわたるを

（大系・二〇八頁八行目）

という川の情景は、あちらこちらに岩が覗く現在の川面の情景とあまり大差ないのではないだろうか。

根来寺が遠いので最初に見学をすることになった。根来寺は『狭衣物語』でも各種参詣記にも登場はしない。今回の旅の趣旨からは外れるがなかなか個人ではいけないので特に寄ることにした寺である。

JR和歌山線の西笠田駅のあたりにこちらがいわゆる本当の妹背山である背ノ山と妹山が川を挟んで向かい合つている。川の中には舟形の中州があり、地図では中州に神社の印がある。東からみると、背ノ山は山らしく見え、妹山は頂上が平らであまり山らしく見えない。しかもその平らな台地とおぼしきところの中央には高い送電線の鉄塔が堂々と建つていて見る影もない。何を考えて妹山のつっぺんに鉄塔を建てたにせよ、文学の名所であるという考えは全くなかつたことは明瞭である。川辺の道は混雑するのか、名手市場から北へ曲がり、広域農道と看板のでている山沿いの道を走行する。

根来寺は大治元年（一一二六）に創建され、根来塗りと本

坊の庭園で有名な寺である。国宝の大塔は明応五年（一四九六）に建立されたもので日本で最大の木造多宝塔だそうである。天正十三年（一五八五）の秀吉の根来攻めの時の弾痕が残っているという。たしかに塔にはいくつもの丸い小さな穴がある。大塔を写真に撮ろうとしたが大きすぎて全部は到底入らない。このほかにも聖天堂や庭園など見所はたくさんあるが時間も予定より遅れがちなので慌ただしく本命の粉河寺に向かう。妹背山を今度は反対から通りすぎてみると今度は妹山のほうが山らしく背ノ山は形が乱れてあまりよろしくない。福嶋先生曰く、「夫婦つてそんなものでしょう」。含蓄のあるコメントである。根来寺に行つたおかげで妹背山を両側から堪能することができたのは幸いであつた。ゆつたりと流れる川を眺めていたら麓谷先生が有吉佐和子の「紀ノ川」の中に「川の流れに逆らつてはいけない。上の女は下に嫁ぐのがよい」という一節があるのだというお話を下さつた。という上上の人口はどうなつてしまうのかななどと思うようでは文学を志す者として失格か。

粉河寺は今回の旅の最重要の地点の一つである。寺の前の小川に橋がかかつていて大型バスはどうかという幅であつたが、何とか通れそうなのでつっこむ。無事通過。しかしその先は工事中になつていて、トンネルのような感じである。入つたら抜けられなくなつてしまうのではと心配になつたがその奥が駐車場と書いてあるのでほとんど強引に入る。駐車

料金表にはマイクロバスの値段までしか書いていない。聞くとマイクロバスの値段でOKとのこと。外の橋を改修して広くしたので大型が入れるようになったが大型バスがここまで入つたのはこれが最初だそうである。記念すべき第一号大型バスとなつた。

粉河寺は『狭衣物語』では石山に似たと描かれる寺であり、狭衣が法華経を読むと普賢菩薩が顕現するので神々しい？雰囲気を感じていたが特にそのような神秘的な雰囲気は感じられない。特に石山寺と似ているとも思われない。小ぎれいな普通のお寺であつた。物語から想像していたとはだいぶ異なっている。

み山の里の寂しさは、げにさ牡鹿の跡よりほかの通ひ路も、稀なりけるを、夜の程に、いと閉ぢ重ねてける氷の楔は、足もいみじう堪え難うて、あゆみもやられ給はず。そこゝも知らず深き谷より、生ひ出でたる木どもの根に、苔がちにうち物古りたる氣色・枝ざしなどの、疎ましげなるに、苦しうて、寄り居させ給へる御顔の色合・氣色など、「山の中にも、目とどめたてまつるものがあるらん」と、ゆゝしきまで見え給ふ。

『狭衣物語』巻三・大系二一七頁冒頭

作者が実際に粉河寺を知っていたかどうかは不明であるし、また平安時代と現代、時期、時刻等あらゆるものが異なる

っているので想像通りと行かないのは無理のないことかもしれない。特に地形のようにあまり変化しないものと違い、寺は建物である。秀吉の根来攻めの折りにはここも焼失している。期待のし過ぎは禁物である。

先が長いので早々に出発する。今回の旅行は距離が短いと思い、回る場所を欲張ったのがちよつと失敗だったかもしれない。しみじみと一所で情趣に浸り想像を巡らすことができない。再びバスに乗り込み、粉河寺を後にする。当初の予定では華岡青洲の墓へも寄るつもりであったが、そこは時間が足りなくなり省略することになった。残念！

東高野街道

橋本まで戻り、そこから国道三七一号線を北上する。これが都人が一般的に使っていたと考えられる東高野街道である。東高野街道の入り口のところ柿の葉寿司の田中というお店がある。ここはなかなかおいしいそうである。我々はその田中から五百メートルほど上にある紀ノ国レストランで昼食をとる。この昼食場所は最後まで決まらなくて橋本市役所の観光課に電話して聞いたところである。予定の時間からほぼ一時間ほど遅れての昼食であった。

現在の東高野街道はりっぱな道路になり、かつて紀見峠といわれたところは長いトンネルになっている。南海高野線もほぼ同じ場所を通っている。トンネルにさしかかるときに用意してきた「たそかれクイズ」をするのを忘れていたことに

気がついた。これは今回の旅行の資料を作成中に思いついたクイズでいろいろな絵巻物から有名な人物を切り抜いてそれがだれかあてるというものである。狭衣はもちろん、護法童子や夕霧、小野道風、吉備大臣などを出してみた。作っている最中はどれも有名な場面で簡単なようにおもわれたが、意外と難しいとの声があがる。正解者には古今集の柄のマウスパッド、古今集の柄の便箋セット、古今集の柄のしおりを用意した。東京国立博物館ミュージアムショップの品である。そんなことをしているうちに紀見トンネルを通過し、クイズに熱中していた人はトンネルを通過したことも気づかなかったというので少し反省する。旅の目的はあくまでも高野街道を辿ることにある。

河内長野市、富田林に入ると道路標識に「近つ飛鳥博物館」の表示があった。羽曳野に至るとやがて古墳銀座といつては何であるが、清寧天皇陵、日本武尊陵、仁賢天皇陵、応神天皇陵、中津姫皇后陵（応神皇后・仁徳天皇母）と御陵が続く。

道明寺天満宮

中津姫皇后陵をぐるっと廻って道明寺に到着。道明寺と道明寺天満宮は明治の神仏分離令によって現在では二つに別れているが、それまでは一つであった。土師氏の寺として創建され、菅原道真の叔母覚寿尼が道真の太宰府左遷を送った寺として有名である。一般的には和菓子のだ明寺粉で有名である。幹事の下調べが甘く、道明寺関係で見るべきものは道明寺天

藤原道長『扶桑略記』治安二年十月十七日より

宇治殿

宇治平等院

東大寺

東大寺

興福寺

興福寺

元興寺

元興寺

大安寺

大安寺

法蓮寺

現在なし。奈良市法蓮町にあった寺か。

山田寺

史跡

本元興寺

飛鳥寺

橘寺

橘寺

竜門寺

史跡

吉野川

吉野川

高野政所

慈尊院（九度山町・紀ノ川畔）

山中假屋

高野山中の仮の休息所か

前常陸介惟時宅

源惟時の邸宅。所在不明。

法隆寺

法隆寺

河内国

大阪府

竜田川

竜田川

道明寺

道明寺および道明寺天満宮

摂津国

大阪府

四天王寺

四天王寺

国府大渡

渡辺津。現在の天満橋付近

田養嶋

天王寺の西、戌亥の方よりの海辺（方角抄・頭注密勘）。大川（難波の堀江）河

満宮の宝物館だけと思っていたため、道明寺の国宝十一面観音の拝観予約を入れていなかった。もしやと思ってお寺にお願いにいったが、取り込み中でやはり見ることはできなかった。道明寺天満宮の方は、しっかりお願いしてあったので拝観料を納めにいつている間に宮司さんが来てくださり、詳しい説明をして下さる。道明寺は治安三年藤原道長が高野山参詣の帰りに宿泊している。藤井寺市史のコピーの他、りっぱなパンフレットも頂いた。恐縮である。宝物館はこの時期、閉まっているが事前に予約あったのですぐに開けて下さった。中には国宝の笏や硯、鏡等道真の遺品がたくさん展示してある。『扶桑略記』治承三年十月の参詣記には道長が竜門寺で、菅原道真の筆跡を見たことが記されている。道真が宇多天皇に従って竜門寺に来たときに書いたものである。竜門寺と道明寺という二つの寺とそれを結びつける道長。締めくくりとしては我ながら綺麗にまとまっていると思うのであるがいかが。これで、今回の旅はすべて終了。道長はこの後、四天王寺まで行き、帰京しているがそこは略した。道明寺天満宮からは町中で興味のある人は個人的に簡単に廻れるためである。

最後に道長と頼通の通った地点と現在比定される場所の対照表を掲げておく。

口付近。
 大阪府東淀川区江口
 山崎 大阪府三島郡山崎
 關外院 関大明神社・三島郡島本町山崎一丁目
 桂河辺 桂川
 七条河原路 七条
 法成寺 京都市上京区にあった寺

奥院 高野山
 御影堂 高野山
 紀ノ川 紀ノ川
 妹山背山 妹山・背山
 粉河寺 粉河寺
 市宿

藤原頼通（『高野山御参詣記』永承三年十月十一日より）

石清水八幡宮
 江口
 長柄橋

和歌浦
 笠道山

一、加陀村八幡宮。二、伽陀寺。
 三、友ヶ島の沖ノ島
 和歌浦
 貴志村。和歌山市梅原・栄谷・中を中心とする地域。

三説あり。
 一、天満橋や天神橋に似た位置。二、中津川に架かり、淀川分流点付近。三、大淀区長柄から吹田市垂水に至る間に点在した橋の集合体。
 長柄橋より下流の名称

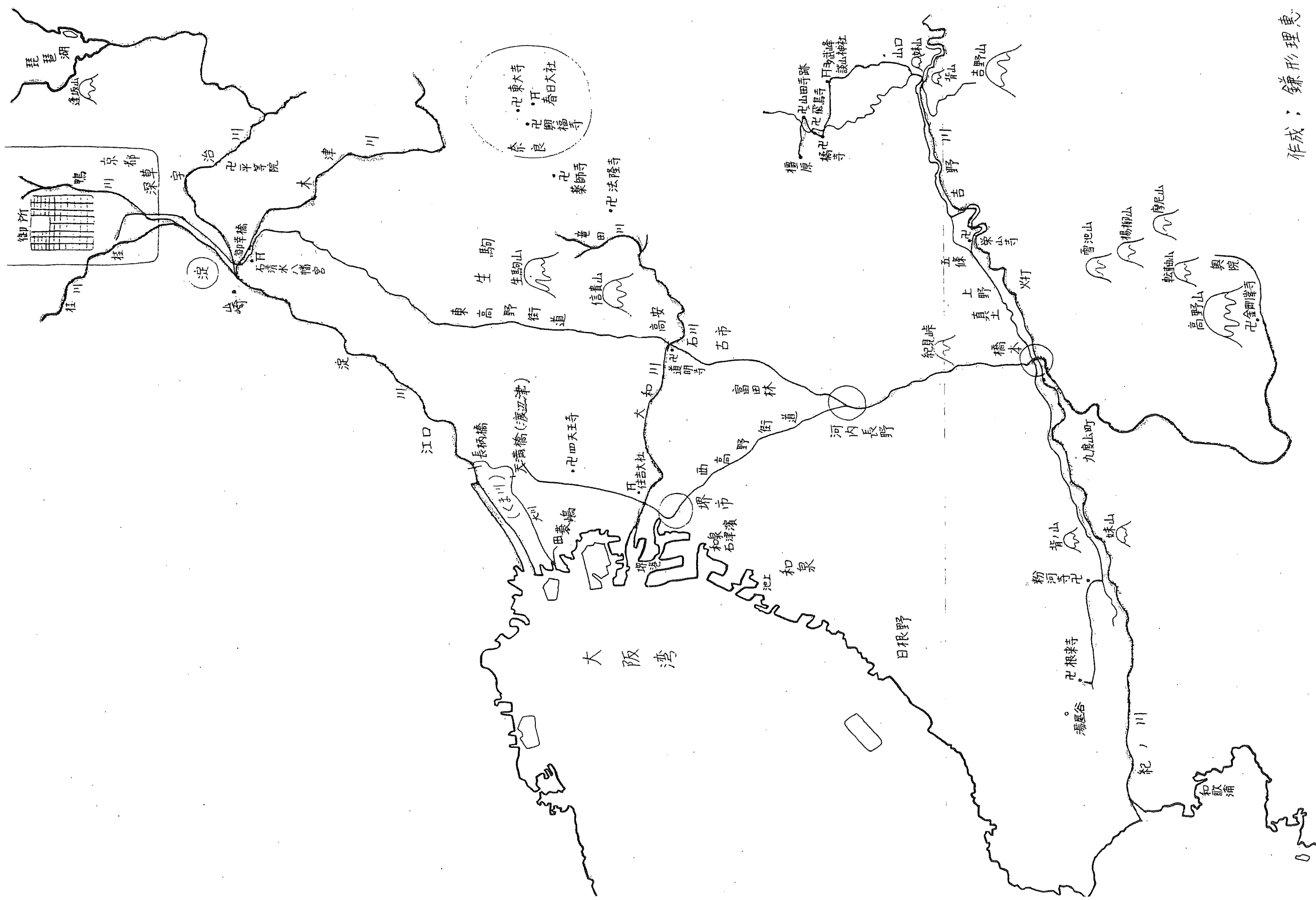
日根野
 四天王寺
 淀川
 京都

熊川
 （摂津名所図会大成）

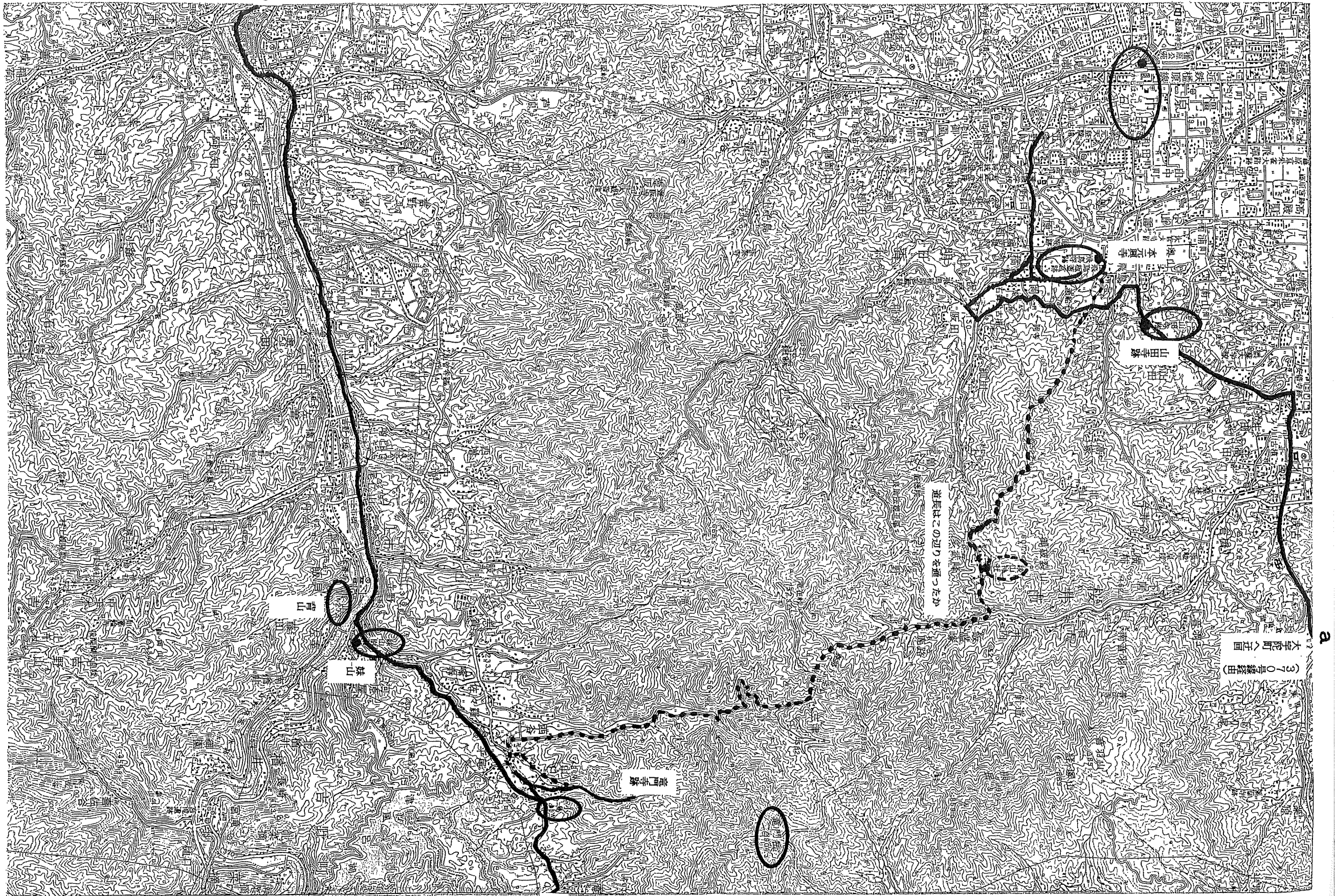
《参考文献》

住吉社
 和泉石津濱
 曾根假屋
 日根野
 紀伊市假屋
 高野政所

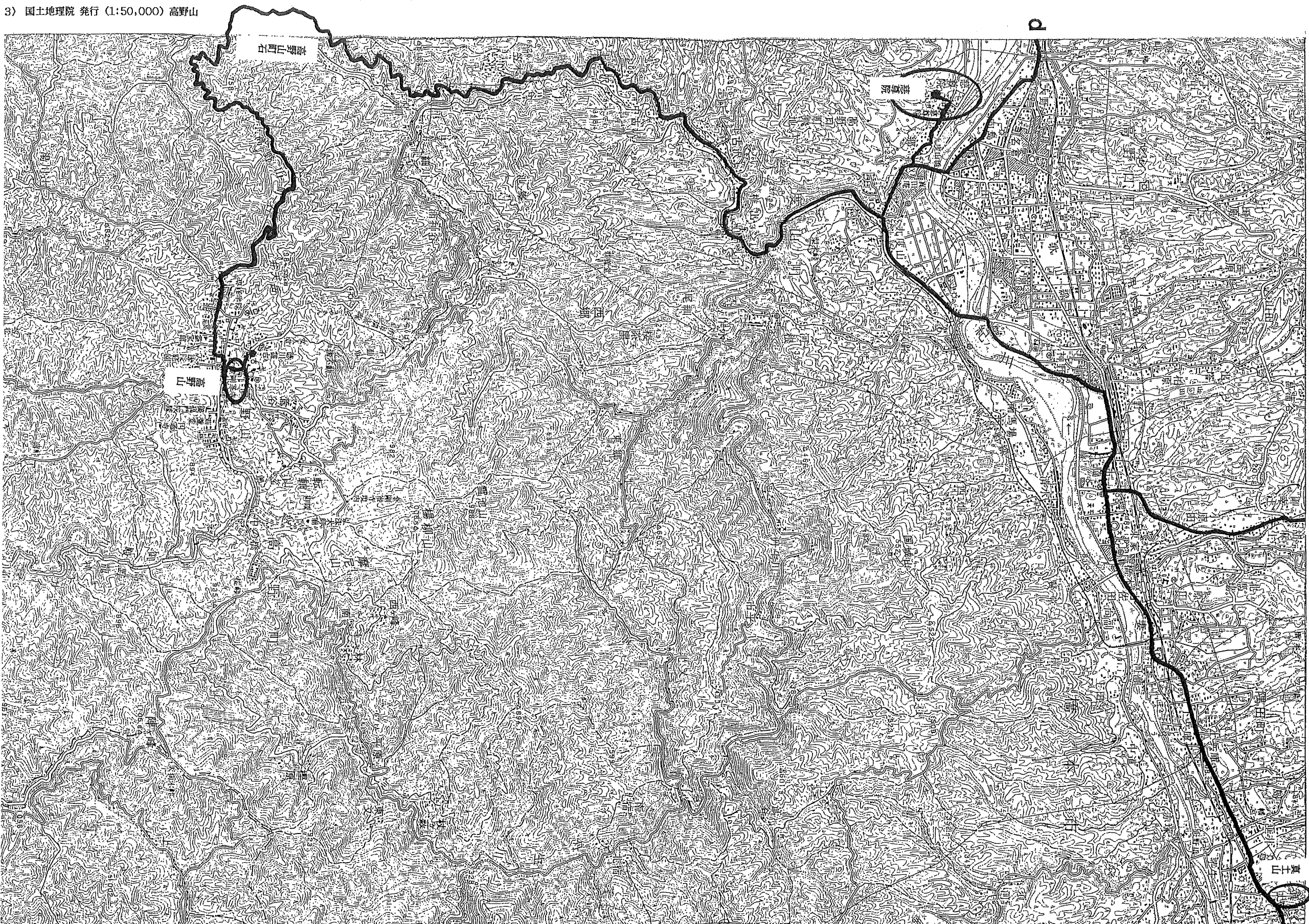
「山田寺」（飛鳥資料館カタログ第十一冊・平成九年度改訂版）
 『日本地名大辞典』大阪府・奈良県・和歌山県（角川書店）
 『日本歴史地名大系』大阪府・奈良県・和歌山県（平凡社）
 『藤井寺市史』コピ―
 『国史大辞典』吉川弘文館
 『高野口町誌』昭和四十三年・高野口教育委員会



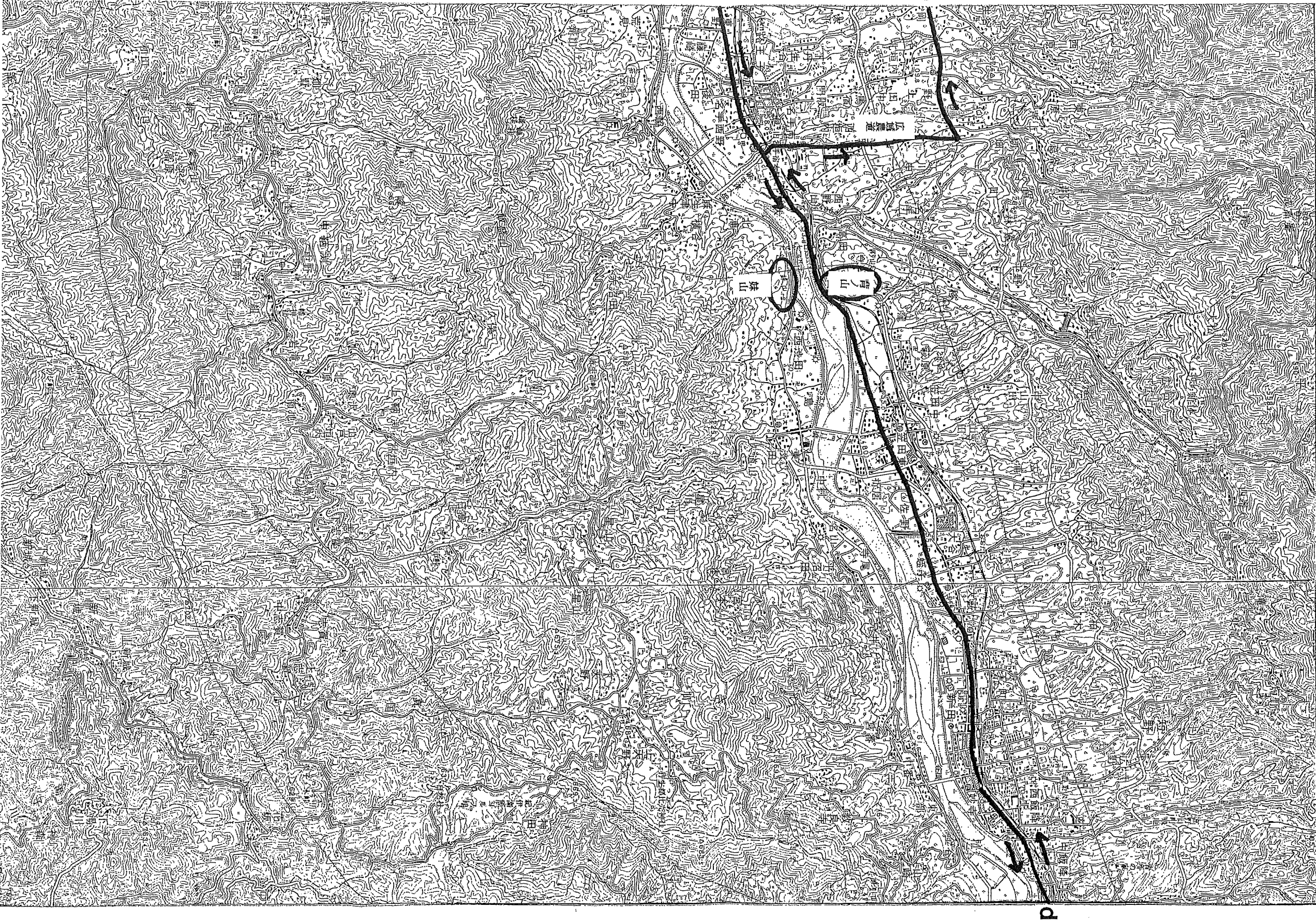
作成：鎌形理恵



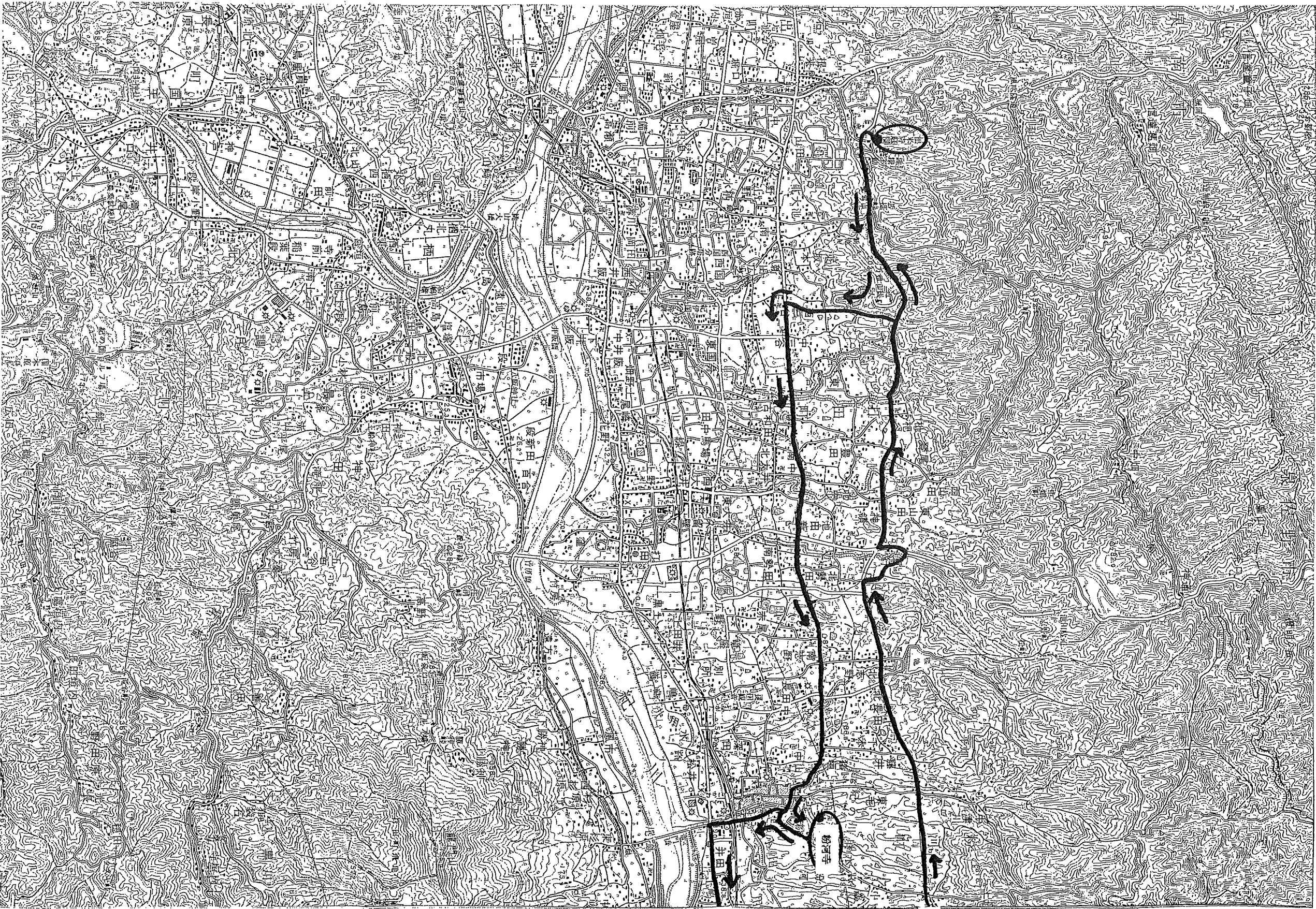


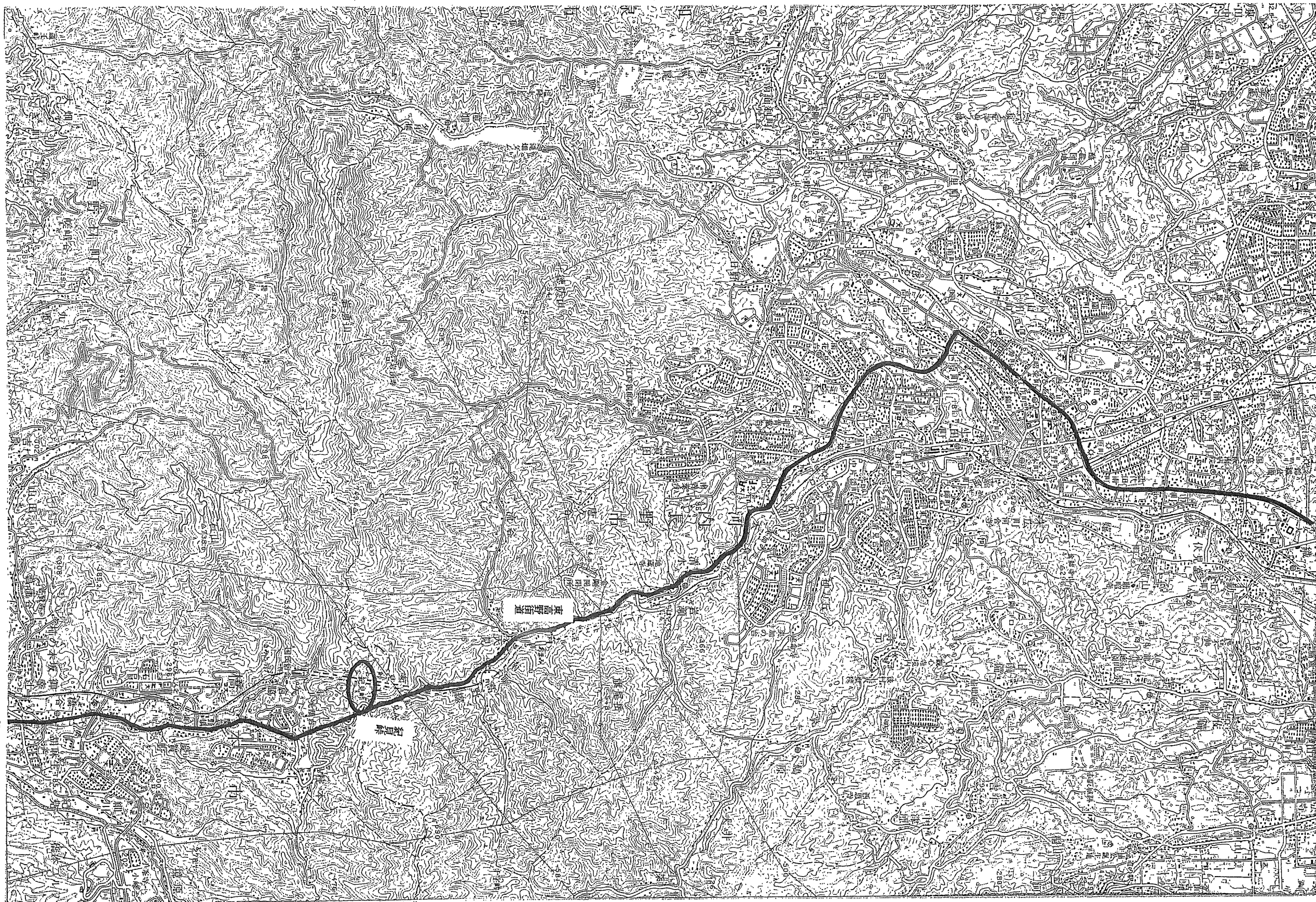


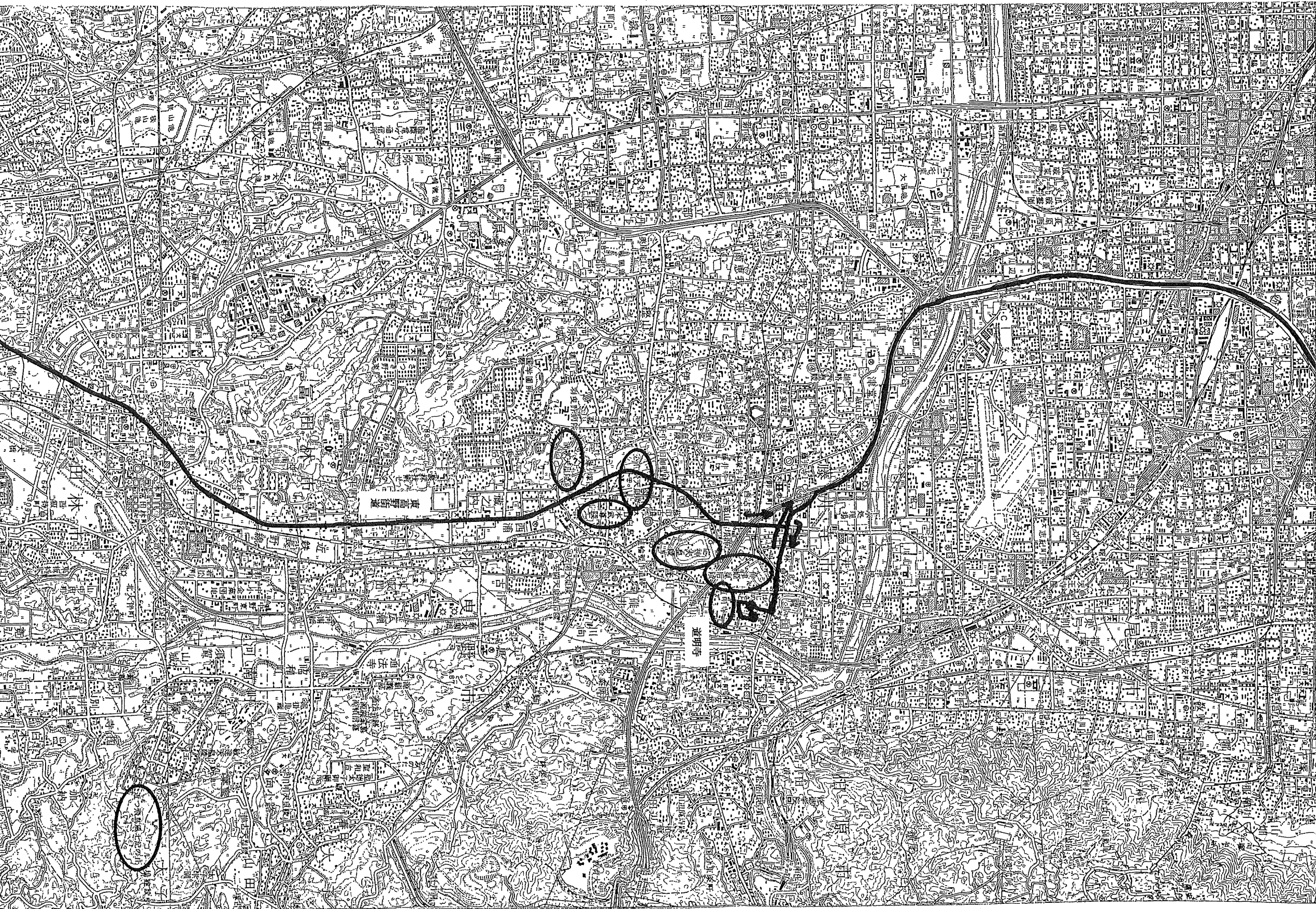
〈4〉 国土地理院 発行 (1:50,000) 高野山・粉河



(5) 国土地理院 発行 (1:50,000) 粉河







新大阪へ